

コラム 48ー ジョンストンの手記・「紫禁城の黄昏」

満州国皇帝溥儀の家庭教師を勤めたジョンストンは、その手記「紫禁城の黄昏」のなかで、満州国建国の正当性について、次のように述べています。

「シナには欧米的な意味での国家は、かつて存在したことはなく、いろいろな王朝があっただけである。元王朝は蒙古民族の王朝であり、清王朝は満州民族の王朝であった。したがって、満州は決してシナではない。そして、溥儀が父祖の地である満州に戻って、独立国家を建設したいと望み、自らの意思で満州国皇帝になった。シナ人は、日本人が皇帝を誘拐し、その意思に反して連れ去ったように見せかけようと躍起になっていた。・・・だが、それは真っ赤な嘘である。」つまり、満州族最後の皇帝溥儀は、紫禁城から追い払われ、家庭教師のジョンストンとともに日本公使館に逃れました。そして、父祖の地である満州に戻って、そこで皇帝になりたいとっていました。その溥儀の夢を支援したのが日本であったのであります。

したがって、満州事変についても、満州に住んでいる満州民族をはじめとする住民を搾取している、匪賊の頭領である張学良を追い払い、あわせて在留邦人の権益と安全を確保するための自衛のための戦いであったといえます。そして、満州国は傀儡政権だと主張する人も多くおりますが、満州人の正当な皇帝が、父祖の地である満州で皇帝になり、大臣も満州人か清朝の家来で構成されていることから、ジョンストンから見ても寧ろ日本には、感謝の気持ちが強かったのであります。また、この本には、日露戦争について、「20世紀初頭の満州は実質的に、完全にロシアに占領されており、清朝はロシアを追い払うために何もしなかった。もし日本が、1904年から1905年にかけての日露戦争で、ロシア軍と戦い、これを打ち破らなかったならば、遼東半島のみならず、満州全土も、そしてその名前までも、今日のロシアの一部となっていたことは、全く疑う余地のない事実である。」